
大切な記憶

ウメ子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

大切な記憶

【Nコード】

N2678D

【作者名】

ウメ子

【あらすじ】

妻は私のコトを忘れてしまった……でも私は今日も会いに行く。

(前書き)

気分転換に思いつくまま書いてみました。

私は今日も通う、妻のもとに。でも彼女は私のコトを知らない…
…いや、覚えていないんだ。

「あら、武田さん。今日もいらしてたんですね」

「ああ、毎日顔を見せないかね。いつ私を思い出してくれるか分からないから」

私は微笑みながら返事をした。ここは養護老人ホームで、さつき私に話し掛けたのは、この施設に勤めている介護士である。

なぜそんな所に私がいるのかと言うと……妻は重度の認知症で施設で生活しているからだ。以前までは認知症も軽かったため二人で生活してきたが、私も年でとても妻の徘徊や身の回りのコトをするのに身体の限界を感じていた。私たちは子宝に恵まれなかったため、世話をしてもらえるコトも叶わない。私にとって苦渋の選択だった。

妻のいる部屋の扉をノックする。中からは、どうぞと言う声が聞こえた。声を確認して私は部屋に入った。部屋のベッドに座り、こちらを笑顔で迎える妻の姿が見えた。

「こんにちは。今日も来てくれたんですね、武田さん」

妻にとって、私は毎日来て話相手をしてくれる人。私が旦那だなんて思ってもいない。妻の記憶は私たちが出会う前までしかない。

私も妻に合わせて、妻の結婚前の妻の名を呼ぶ。

「ええ、私も中川さんと話すのが楽しみなんですよ」

妻はいつものように嬉しそうに昔話を始める。妻の子供時代の話だ。何度も聞いたコトあるが、楽しそうに話す妻を見ると、幸せな気持ちになるため、何度も聞ける。

幸せな時間はあっという間に終わってしまう……気が付くと夕方になっていて、太陽が沈み始めていた。空はきれいなオレンジ色に染まっていた。

「そろそろ帰る時間ですか」

「あら、もうそんな時間かしら？楽しい時間は終わるのが早いわね」

妻は少し残念そうに言った。私はそんな妻を前に帰り支度を始めた。

「また明日も来てくださいね」

ええ、と返事をして私は部屋を出た。

次の日も、そのまた次の日も、私は施設へ通った。妻の記憶はまだ戻らない……私は最近、諦め始めていた。私を思い出してくれなくても、妻と話ができるだけで幸せなんだと思うようにした。

「やあ、また来ましたよ」

妻に笑顔で声をかけた。妻はいつもと様子が違っていた。他の人から見たら分からないかもしれないが、私には分かる……何かあったのだろうか。

「中川さん、どうかされましたか？」

無言で私を眺めていた。目は虚ろで、唇は小さく震えていた。

「何か…何か大切なコトがあるんです。でも思い出せない……とても大切なコトなのに」

もしかして、私のコトだろうか。期待に胸が膨らんだが、焦ってはいけない。私は微笑みながら妻の横に座り、肩を抱いた。妻が不安になったとき、私がいっもこうして妻を安心させていた。あの頃のように肩を抱き、手を優しく握った。妻に触れたのは、どれくらい振りだろうか……。

すると、妻は目にいっぱい涙をためて私を見つめていた。

「……あなた」

ポツリと一言を言った妻は涙を流していた。武田さんではなく、あなたと呼んだのだ。私は驚いて妻を見た。妻はもう一度私を呼んだ。

「あなた……ごめんなさい。私、あなたのコトを……」

「いいんだ。こうして思い出してくれたじゃないか。私をあなたと呼んでくれたじゃないか」

私と妻は涙を流しながら抱き合った。今までの時間を埋めるように。涙でくしゃくしゃにしながらも、笑って二人の思い出を語り合った。

しかし、また妻の様子がおかしくなった。きよろきよろと辺りを見渡したかと思うと、何事もなかったかのように私に話しかけた。

「いらしてたんですね、武田さん。今日もお話しましょうね」

妻はまた戻ってしまった。私も何事もなかったかのように、そつと指で涙をぬぐった。

「ええ、今日は私の若かった頃の話でもしましょうかね」

「ぜひ聴きたいわ」

妻は笑顔で答えた。妻の表情はとても幸せそうだった。

私は今日もまた通う……少しの時間でも妻の記憶が戻るコトを信じて……。大切な私たちの思い出を少しずつ話していこう。

END

(後書き)

こついう小説は初めて書きました。どうだったでしょうか？感想・評価をお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2678d/>

大切な記憶

2010年11月24日16時11分発行